



ケニア唯一の国際貿易港であるモンバサ港では、貨物取扱量がこの10年で約3倍に。日本の支援により拡張工事が進められている

私はこれまで、アフリカ12カ国取材してきました。初めて足を踏み入れたのはエジプト、その次が南アフリカ共和国。サハラ砂漠を挟むと、北と南でここまで違うのかと驚いた記憶があります。私が知っているのは、まだアフリカの一部にすぎない。そこで2月中旬、アフリカの『今』を確かめるために、ケニアとモザンビークを訪れました。

この2つに共通しているのは、海に面した国であるということ。内陸国が多いアフリカが外とつながっていく上で、沿岸の国々は重要な役割を果たしています。そこでケニアで最初に向かったのは、東アフリカの流通の拠点として知られるモンバサ港。今は飛行機という移動手段がありますが、その昔、ヨーロッパの人々は海を回り、この港を通じてアフリカに入ってきました。文字通り、この大陸の『玄関口』となった港です。

ここで痛感したのが、経済・社会イン

フラの重要性です。アフリカは天然資源も豊富で、ビジネスチャンスにあふれているのに、モンバサ港に関して言えば、コンテナの置き場がなかったり、積み下ろしをする場所がなかったり…。輸出できるモノはあるのに、港の機能が追い付いていない状態。また、港につながる道路整備の必要性も感じます。首都ナイロビの交通渋滞は本当にひどく、どれほどの経済的なロスを生んでいるか図り知れません。

ここで出番なのが技術大国ニッポン。モンバサ港の拡張や市街地につながる道路の整備などを、日本は国際社会の中でも先導して行っています。今、新たな市場を求めて、アフリカ進出を考えている日本企業は多い。その上でネットワークとなっているのがインフラです。アフリカと日本がこれから『パートナー』として歩みを進めていく上で、この分野の協力は非常に意義あることなのです。



現地に出会った子どもたちと。彼らが大人になった時、アフリカはどのような姿を見せてくれるのだろうか

写真提供：日経ビジネスオンラインスペシャル
(business.nikkeibp.co.jp/)

『アフリカ』と聞いて、どんな所を思い浮かべますか？一面に広がる大自然、キリンやゾウなどの野生動物、テロ、紛争、貧困…。日本で暮らす多くの方が抱く『いわゆるアフリカ』のイメージ。でもそれだけがアフリカの姿ではありません。

今年に入ってから、アルジェリアでのテロ、エジプトでの熱気球の事故と、日

『今』を確かめる旅に出る

本人を含む尊い命が立て続けに奪われ、日本のメディアでも連日のように取り上げられました。アフリカが日本でニュースになるのは、やはりこうした種の事件のことが多い。今回のことをきっかけに、『アフリカは危険』というイメージが、また一気に広まってしまったように感じます。

しかし、よく考えてみてください。アフリカ大陸には54の国があります。つまり、少なくともその数の分だけ『多様な姿』があるのです。ですから、アルジェリアでのテロを受けて『アフリカは危険』と決め付けてしまうのは、『インドネシアでテロが起こったから日本も危ない』と言っているようなもの。アフリカは近年、平均約5%の経済成長率を維持している。そう、飛躍的に発展を続ける、ポテンシャルにあふれた地域なのです。

モンバサ港の新コンテナターミナルの建設には日本人技術者が尽力



池上彰さん



が語る



Akira IKEGAMI (フリージャーナリスト)

1950年長野県出身。慶應義塾大学卒業後、日本放送協会(NHK)に入局。32年間、報道記者として活躍する。94年から11年間放送された『週刊こどもニュース』のお父さん役で一躍人気を博す。退職後はフリーのジャーナリストとして取材活動を続ける。『世界を救う7人の日本人』(日経BP社)、『そうだったのか!現代史』(集英社)など著書多数。東京工業大学リベラルアーツセンター教授。

日本から遠く離れた暗黒の大陸―。そんなイメージの強かったアフリカは今、目が離せない存在になりつつある。広大な土地に眠る天然資源、労働人口の拡大…。希望と発展の可能性にあふれたアフリカの大地をフリージャーナリストの池上彰さんが歩いた。

力の今

日本の技術力で希望の光をともし

ケニアでは、首都の北西部にあるオルカリア地熱発電所も取材しました。ケニアは東アフリカの経済拠点になっていますが、電力が安定的に供給されているのは全世帯の約2割。残りの8割は、電気のない生活を送っていると言われていす。水力発電に依存してきたケニアですが、近年は干ばつなどの影響で、電力不足がかなり深刻です。これから進出しようという企業にとっても、それは懸念事項の一つでしょう。

そこで導入が進められているのが地熱発電。この分野でも、世界トップクラスの技術を誇る日本がお手伝いをしていま



オルカリア地熱発電所の前で。1970年代から地熱発電の開発が進められている

す。実際、オルカリアの発電機は日本製。世界の地熱発電機のシェアは、三菱、東芝、富士電機の三社で7割を占めているそうです。国際協力にこれを生かさない手はないですよ。電力は、発展のともしびです。農村に電気が通ると、子どもたちは夜も勉強ができるようになります。みんなが勉強するようになると、国力は確実に上がってきます。

現場では、現地の人たちが自信に満ちあふれた表情をしているのが印象的でした。「この仕事を通じて国を豊かにしていくんだ」という彼らの誇り高い姿に、ケニアの未知なる可能性を感じたのです。暗い所に、一つ、二つと、明かりが増えていく。こうした目に見える発展をお手伝いできることに、日本人技術者は醍醐味を感じているようでした。

余談になりますが、地熱発電所の取材中に、アフリカらしいなあという場面に遭遇しました。地熱発電の水や蒸気を運ぶパイプが上に大きく曲がった箇所があったのですが、なんとその下をキリンが通っていたのです。熱による伸縮を防ぐためらしいのですが、どうせ曲げるなら、キリンが通れるように上に曲げようという発想だったようです。この発電所は国立公園の中にあるので、野生動物との共生がキーワード。そもそも地熱発電は再生可能エネルギーですから、全体のコンセプトとしてぴったりに合っています。

ブラジルと農業の知見を共有する

続いて訪れたのはモザンビーク。ケニアから南アフリカを経由して、約6時間のフライトです。この国には本土以外に「モザンビーク島」という、かつて港町として栄えた島がありますが、それがそのまま国名となったそうです。ポルトガルの植民地ということもあり、ケニアやこれまで訪れたアフリカの国々とはずいぶん雰囲気が違う。アフリカはどの国の植民地だったかによって、公用語も発展の

度合いも異なりますから、それぞれにふさわしい開発のあり方を考えなければなりません。

そこでモザンビークで進められているのが農業プロジェクトです。食は人々が豊かに暮らしていくための重要なキーワード。日本はインフラ整備なども進行中のナカラ回廊周辺の地域で、小規模農家の生計向上にも取り組んでいます。その技術指導で活躍しているのがブラジルの専門家です。

日本はなぜ、海を越えて、南米のブラジルとタッグを組んだのでしょうか。あまり知られていないかもしれませんが、



地方の農家の人たちは携帯電話を使い、市場の価格などをチェックしている



モザンビークの大地から真っ青な空に向かって“希望の芽”が伸びる



北部の都市ナンブラ周辺地域は、雨量も多く土壌も肥沃で農業のポテンシャルが高い



キリンも通れる地熱発電のパイプ



現地企業の責任者から、発電所の運営状況について説明を受ける



地熱発電機から出ている白い煙は水蒸気。環境に配慮した発電方法として注目は高い

ブラジルとモザンビークは共通点が多いのです。緯度はほぼ同じ、気候風土も似ていて、使用言語は両国ともポルトガル語です。さらに日本は、かつて不毛の大地と呼ばれたブラジルのセラード地区を、一面の大豆畑に生まれ変わらせたという実績があります。今度はモザンビークに「農業革命」を起こす。そのために、この3カ国が組めば最強です。

投資の力で可能性を切り開く

アフリカは今、長年続いていた内戦が各地で終結しつつあり、平和の恩恵が届き始めています。そうすると人々は「これまで、なんであんなことをやっていたんだろう」と感じ始める。そんな彼らが次のステップに進む上でカギとなるのが、海外からの投資です。

これまで支援を受けてきたアフリカが日本を含む海外の企業と対等なパートナーとなり、今度は「魚を釣る側」として、自分たちの資源の生かし方を自分たちで考えていく。外からの風が入ること

現場に行くと、農業のスペシャリストたちが肩を並べ、共に汗を流しています。ブラジルの専門家が技術指導をし、モザンビークの人々が体を動かし、日本人は黒子として彼らの活動をバックアップしていました。まだ始まったばかりですが、これから大きな成果が期待できる創意工夫にあふれたプロジェクトだと感じました。

現地の人々もポテンシャルに気付き、良い化学反応が起きるはず。アフリカには、54の姿があります。

日本の皆さんにも、そんな一つではない多様なアフリカを知り、興味を持つてほしい。そして日本企業にも独自の技術力やビジネスの経験を生かし、アフリカという新たな舞台で挑戦していったほしいと思います。今年6月に横浜で開かれる「第5回アフリカ開発会議（TICAD V）」が、そのきっかけの一つとなることを願っています。



横浜がアフリカで染まる!

第5回アフリカ開発会議 (TICAD V)

開催日：2013年6月1日(土)～3日(月)
共催：国連、世界銀行、国連開発計画、アフリカ連合
開催地：横浜市

主なテーマ

「躍動するアフリカと手を携えて～質の高い成長を目指して～」
①強固で持続可能な経済
②包摂的で強じんな社会
③平和と安定

TICAD(Tokyo International Conference on African Development) とは？

1993年に日本のイニシアチブで始まった国際会議。5年に一度、日本にアフリカの首脳級代表と、国際機関、援助機関、企業、NGOなどが一堂に会し、アフリカ開発の方向性について議論。アフリカの「オーナーシップ(自効努力)」を尊重し、国際社会との「パートナーシップ」を重視したアフリカ開発を目指す。